

万葉集における七夕歌

針 原 孝 之

万葉集における七夕歌

(一)

万葉集の七夕歌は百三十三首にのぼるが、これは上代人が遣唐使の見聞などによって中国の七夕伝承を受け入れて詠んだものである。日本にも古くからたなばたはあって、七月になると遠くより水の神がやってくる。その神を迎えるために、海、河などのたなの上で機をおってくらしている少女がいる。これがたなばたつめであると折口先生は言われる。しかし万葉集の中に詠まれている百三十三首の七夕歌は、日本の古くからあつた七夕にほとんどみれずして、中國の牽牛織女交會説話を頭の中で思い浮かべながら甘い恋にひつていたのである。

牽牛織女が中国の文献にいかに記載されているかというと、かの七夕説話の牽牛はいうまでもなく星の名称で今の大座の「アルタイル」である。しかるに「史記」天官書の北宮玄武の条にある、

牽牛為犧牲其北河鼓。

の牽牛は虚危營室斗務女などと共に宿名の一つであるが、「爾雅」の翼には「星紀牽牛也」とある一方に「河鼓謂之牽牛」といつて牽牛は宿名であると共に、別に星の名前ともされていたことが知ら

である「荊楚歲時記」の「七月七日為牽牛織女交會之夜……略」であるが説話の起源は晋代よりもっと古い。すでに「詩經」の中に維天有レ漢 監亦有レ光 跛彼織女 終日七襄 雖則七襄 不レ成報章 院彼牽牛 不以版を補とあるからである。

また「文選」の中に兩星相思慕することが一層情趣ゆたかに述べられているが、その頗著なものは「古詩十九首」の第十首にある、迢々牽牛星 皎々河漢女 織々擢素手、札々弄機杼、終日不レ成彼章 泣涕零如雨、河漢清且浅、相去復幾許、盈々一水間、脉々不レ得レ語。である。歌の内容は牽牛と織女の二星の恋愛を歌って、夫や恋人に離れている女の心を述べたものである。この頃から牽牛織女の民間説話はようやく有識者の間に広がるようになつたらしい。

(二)

初秋の夜空に輝いている銀河をみつめ、ロマンチックな気持に誘われて、天上の恋に想像のつばさをのばし、中国文学の知識に富んでいる文化人の詠んだ七夕歌を分類してみると、

山上憶良（卷八）——十二首
湯原王（卷八）——二首
市原王（卷八）——二首
間人宿禰（卷九）——二首
藤原房前（卷九）——二首
大伴家持（卷十七と二十）——十三首
人麿歌集（卷十）——三十八首

れる。「星經」に「牽牛六星闕梁」とあるのが宿名としての牽牛をさしたことは承知の通りである。また織女は琴座の女星「ヴェガ」なることはいうまでもなく、「史記」天官書に宿名務女について、「其北織女、織女天女孫」とあり、「星經」には「織女三星在天市東端、天女生朶果絲藏珍寶」とある。七夕に二人の子供をそえて三星を見ることは眼にうつる印象からする自然なことで、中国でもこれを「織女三星」と呼び、漢代孝堂山の画像石には機を織つている女人の上に星の白まるの形に結んでいる。そして子供の星については「二小星を女子となす」といった。また女の形を織女の足とも見て、「詩經」に「足を瓜立てる織女の」の意味の句がある。さらに中国で織女の名がついている最古の文献「夏小正」に「秋初晉織女東纏云々」とあるのは、織女三星の中の七夕と二細（二人の子供）のなす角が口のよう東に向いていたものといえよう。「楚辭」に「伝説弓騎翁与織女兮合婚」とあるや「准南子」に「若夫真人則勤浴手至虛。而遊于滅亡之野」（中略）妻宓妃、娶織女天地間。何足以留其志」とある織女は単に女性とされたところから取られたのである。

牽牛織女交會のことが明瞭に記載されているのは、晋の宗慤の著

遺新羅使（卷十五）——四首
作者不明（卷十）——六十首

となる。中西進氏（「七夕歌群の形式」）は七夕歌を次のように書き改め、七夕歌を二群に大きく分類することができると思べられて

る。

一、人麿及びその周辺 四十一首

二、憶良及びそれ以後 三十三首

三、作者未詳 六十首

このように人麿を中心とする歌群と憶良及び家持を中心とする歌群の二群に分け、作者未詳を除けば、きわめて限られた人々の作になると述べ、ここから問題を解こうとされている。また憶良の左註について、

右養老八年七月七日応令（五一八）

右神亀元年七月七日夜左大臣宅（五一九）

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河（一五二〇——一五二一）

右天平二年七月七日夜師家集会（一五二三——一五二六）

と見えることから、中西進氏は「天平年間には貴族官人の間に七夕の会が年中行事として行なわれていた」と推定される。この憶良の左註について年号が明記されていることは、その宴がかなり意識されたものであり、重要であるかどうかというより、記録にとどめておかなければならぬものであったと思う。

今二星の会合において牽牛の立場から詠んだ歌、織女の立場から

万葉集における七夕歌

牽牛星の立場から詠んだ歌	五十首
織女星の立場から詠んだ歌	四十一首
第三者の立場から詠んだ歌	二十四首
立場がはつきりわからない歌	十八首

となる。牽牛の立場から詠んだ歌の一例をあげてみると、

風雲者二岸爾可欲倍母吾遠嫁之事曾不レ通（一五二一）

多天手ニ毛投越都倍吉天漢船太而礼婆可母安麻多須弁奈吉（一五二二）

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具（一五二三）

天地等別之時從自媚然叙年而在金待吾者（一五二四）

などがあり、さらに、天丹舟游天河風者吹友浪立勿忘（一五二五）

年丹裝吾舟游天河風者吹友浪立勿忘（一五二六）

牽牛の立場から詠んだ歌の一例

牽牛はただ一度舟装いして出かける舟だから浪よたつてくれるなど（一五二七）

牽牛の立場から詠んだ歌の一例

牽牛相向立而吾恋之君來益ナリ桑利解設ナ（一五二八）

久方之漢瀬爾船泛而今夜可君之我許來益武（一五二九）

天漢伊刀河浪者多々禪母母候難之近此頃乎（一五二四）

天漢浮津之浪音佐和久奈里吾待君思舟出為良之母（一五二九）

などがある。また、天漢水左門而照舟覓舟人妹等所見寸哉（一九九六）は牽牛星が舟をいで天の川を渡ろうとする構想である。この歌に誇張のところがあるが、想像力はよく働いていて、天上の恋の成果に思いをはせていることがわかる。

天漢發立上櫛幅乃雲衣能飄仙鷗（二〇六二）

秋風吹漂蕪白雲者織女之天津領巾冠（二〇四一）

は織女の白雲に乗って飛翔する仙女のように想像し、大空にただよう白雲を見て、織女星の領巾や衣に見立てているのは優雅である。

しかし立場がはつきりしないのである。立場不明の部類に入れるようしかたがない。また清くすみわたった夜空の奥に交金の楽しみを思いやつて第三者の立場から詠んだ歌に、

天漢梶音聞孫星与三織女今夕相霜（二〇一九）

天漢發立度率牛之轍音所聞夜深往（二〇四四）

天漢河声清之牽牛之秋渡船之浪珍香（二〇四七）

天漢八十瀬發合男星之時待船今游良之（二〇五三）

などがある。天上から伝わってくるこの世ならぬ樹の音に心耳をすまし、あるいは流れをこぐ船の飛沫で水面の煙るさまを想像している。

天漢發立度といい「八十瀬發合」などといっているのは、すみわたった深い夜空に銀河の白くぼやけてみえるのを、しかも曰模糊とした霧のかかっている趣にとりなしたものである。

前に掲げた表をさらに次のよう背面分けてみることができる。

						卷数	歌数	牽牛の立場から詠んだ歌	織女星の立場から詠んだ歌	第三者の立場から詠んだ歌	立場がはつきりわからぬ歌
山上憶良						八	12	3	6	2	1
市原王						八	1	0	0	0	0
湯原王						八	2	1	0	0	0
間人宿禰						九	1	0	0	0	0
藤原房前						九	2	0	0	0	0
人麿歌集						十	38	0	0	0	0
作者不明						十	60	0	0	0	0
遣新縁使						十五	4	0	18	20	0
大伴家持						十七と二十	13	1	1	24	7
							8	1	1	3	0
							1	1	0	8	7
							1	0	0	0	1

氏は「代作とその源流」の中で、

代作には二つの場合を考えられ、一つは文字通りの代作で他人のために作ったものであり、いま一つの代作は創作的代作である。即ち他人のために作ったり、当面現実に被代作者が存在するわけではない。そういうことは無関係に、専ら作者の創作意識によつて作られたものである。

と述べられている。もちろん七夕歌は後者にあてはまるものである。そして創作者が立場を色々変化させることによって、自分の心情の豊かさを喜んでいたのではないだろうか。ともあれこれらの歌は牽牛、織女の立場にたって詠んだ代作である。また長歌になると一首中の前半で、牽牛星が織女星と天の川を隔てて相離れ、安き空

万葉集における七夕歌

なく涙にくれて悲しんでいる様子を示して第三者の立場を思わせ、後半では作者は牽牛星の立場にたつて詠んでいて立場の混在を示す歌もある。一五二〇の歌はそのよい例である。

また伝説の考え方について作品をたどると中国文学と類似の発想をもつものがある。すでに小畠氏、中西氏によつて旨論されてゐる

がその一例を示す。

秋去者川獨立 天川河向居而怨夜多
は中國文学の

「望織女詩」
「七夕詩」

二十六

（一）久毛の夜深く、我も君も、月夜の下で、久毛の心事に耳を傾けた。

といふ一夜のみの欲情を嘆くものは、

「七夕詩」
王奇
秋隨還路帰
歛遂今宵夙

「七夕詩」

と見えていた。されば単なる中国文学の模倣から類似しているのでなく、(少しあは影響を受けているとしても)人間の心情の共通性

によるものだと思う。七夕の恋の世界における人間の眞の感情から

にじみ出たものが類似点を生みだしたと解すべきであろう。

(三)

浪漫的な天上の恋も万葉人にとつては、地上の恋とたいして変わらなかつたである。それは藤原麻呂と坂上郎女の相聞、贈答の歌から解明できると思う。今藤原麻呂の方から見ていくことにする。

「梗概」に破綻があらわれているというのが従来の説である。郎女はかなり麻因のきびしい制約をうけていてことに目をみはらなければならないし、そのような要求にみごとに応じてみせた郎女の創作意欲をもう少し高く評価する必要があるよう思う。無理な句作りはどこからきてるか。またきびしい制約の中で本当の気持を詠むことはむずかしい。それに近いものが詠むことができても、かなりゆが

好渡人者年母有云乎何時間曾毛吾恋爾來

の歌はすでに諸説が引いているように、その類歌として卷十三の
「シテタクマ」シテタクマ「アリモヒト」アリモヒト「ハアツラフ」ハアツラフ「コイツノ」コイツノ「シヅキ」シヅキ「タガタケル」タガタケル（三二六四）

を考えることができる。即ち卷十三に伝えられるような古歌のごく

一部分を変えて、自分の歌に改作するという手法がとられている。武田祐吉博士は「万葉集全註釈」で、古歌では「年渡」と一句で述べ

べているところを「好渡人者年母」というふうに一句に跡がついてい
るのが新しい感じがすると述べていらねる。このよう^{可ヒ}_{ササギ}て

ることによって古歌とは違った新鮮味を出そうと工夫していること

が認められる。この一首に托された男性の心情というものは決して単純ではない。久米常民氏は「万葉集贈答歌における文学の誕生」

のなかで次のように述べていられる。「問題なのはこのような複雑な心情の自問の歌をどう受けとつ、どうおもひるかうまいふうに」と

くる。伝達の第一である相手の愛情に対する返答だけでは、決して

相手を満足させるものとならないのである。相手のしかけてきたことを正當に評価して、それにそのまま答へなければならないのである。

その意味で負担はまさに二重となる。」これに対しても、坂上郎女は

原田喜作の「河乃小石跋渡」夜干玉之黒馬之來夜者年爾母有梗

とある。この歌も諸註が指摘しているよつと同じく巻十三の
川頬ノ石迹渡野玉之黒馬之來夜久ハツモニアズメカモ
(一一一)

によっているのだろう。この返歌で坂上郎女は自己の環境に結びつ

りて佐保川をもたごみ 麻呂の七夕の恋を暗示した歌にも、七夕の歌で返歌している。さらに巻十三の古歌を利用すれば自分も同じ巻の古歌で応じてはいるのである。しかし郎女の歌は結句「年爾母有

んだものとして歌に現われると思う。郎女一麻呂の歌も地上の恋というより天上の恋のように自分の気持からはなれた代作のようなもので、季節的な習慣と結びついている感じがする。万葉集の七夕歌は物語的な要素を持ち、貴族階級においてかなり真実味の乏しい虚構の世界に羽根をのばした遊戯として歌われていたのではないかと思ふ。